

INDEX 2 IAU International Conference/ダイバーシティ・ウィーク 3 新留学プログラム開始/学生向けアプリ3月リリース 4 課外活動団体組織 新代表者決定

2024年度上智地球市民講座開講報告

2025年度春学期の
受講生募集は2月3日から

2024年度に上智大学Sophia Future Design Platform (SFD) 推進室は新たな公開講座『上智地球市民講座』を開講し、今年度開講の全ての講座が終了した。春学期・秋学期合わせて10代～80代の延べ822人の受講があった。

本講座は「社会変革の時代に、自らの『地球市民』としての生き方を、前向きかつイノベティブにデザインするための学び～上智で出会う一歩先の自分～」がコンセプト。①SDGsや気候変動、エネルギー、難民などに向き合う「社会課題」、②AI、バイオ、ビッグデータなど先端のイノベーションを探索する「技術革新」、③働き方、生き方、哲学など大きな変貌を遂げる社会を考察する「社会変革」という3本柱を学びのテーマに据えている。語学やスキルの取得に主眼が置かれがちな従来の公開講座とは異なる新たな教育プログラムとして、今年度は春学期に19講座、秋学期に17講座を開講した。講義回数は4回で、対面型・オンライン型・対面とオンライン併用型の3パターンで開講することにより、全国のみならず海外在住の方も受講できるようにした。受講満足度は96.1%であった。

受講生からは「高校では学ぶことができない専門的なことを学ぶことができた。また普段は関わること



総合人間科学部教育学科相澤真一教授による講義「日本社会の格差と教育」の様子



とのない年齢の方や出身の方、それぞれ違った経験をしてきた方とのグループワークを通して新たな意見や価値観を知ることができ、本当に貴重な経験となりました(高校生)、「書籍などからは学べない具体的な内容に触れることができ、とても充実した時間を過ごすことができた。興味深いエピソードが多く、講座に参加して良かったです(30代社会人)」、「今まで深く気に留めていなかった事象や歴史にも大きな意味があり、そこに関わってきた人や物が多大な影響を与えていたことに改めて気付かされた。知らない事を知る、違った視点から物事を見るという、当たり前なのに日常生活で疎かにしてきたことを考える大変良い機会となり、毎回とても興味深く参加させていただきました(50代社会人)」、といった感想が寄せられた。

2025年度は新たな講師・講義テーマで講座数を増やし、春学期は28講座を開講予定。今後も多様な世代、立場、バックグラウンドの受講生が共に学び、新たな価値を創出する機会として「多層的な学びの場」を提供していく。2025年度春学期受講生募集は、2月3日(月)から上智地球市民講座Webサイトにて受付開始予定。



2025年度春学期開講予定の講座概要(※各講師肩書は2025年1月現在)

No	テーマ	担当講師	講座名
1		神学部神学科 特別契約教授 小山 英之	戦争システムから平和システムへーキリスト教平和学/パレスチナ紛争・北アイルランド紛争の事例から考えるー
2		総合人間科学部社会学科 教授 芳賀 学	時事トピックから現代社会を読み解くーお祭りや聖地巡礼(観光)をめぐる諸問題ー
3		外国語学部イスパニア語学科 教授 谷 洋之	入門・ラテンアメリカの経済と社会ー貧困・格差問題を通じて考える世の中の仕組みー
4		外国語学部ポルトガル語学科 教授 子安 昭子	ブラジルから見た世界ー存在感が増すグローバル・サウスを考えるー
5	社会課題	総合グローバル学部 総合グローバル学科 教授 前嶋 和弘	アメリカと世界、そして日本
6		総合グローバル学部 総合グローバル学科 教授 丸井 雅子	ローカルとグローバルからみる文化遺産ー上智大学で学ぶ世界遺産アンコールー
7		グローバル教育センター 教授 東 大作	分断の時代の和平調停と平和構築ーガザ、ウクライナ戦争、南スーダン、アフガニスタンー
8		基盤教育センター 特任助教 藤井 知	異常気象も見据えた防災のあり方ー地域コミュニティ編ー
9		文学部新聞学科 特別契約教授 水島 宏明	SNS時代のテレビ最前線ーテレビが直面する課題ー
10		経済学部経済学科 准教授 倉田 正充	AIの社会への貢献と課題
11		理工学部物質生命理工学 教授 堀越 智	電子レンジの魔法ーマイクロ波の科学とその応用ー
12	技術革新	理工学部機能創理工学 教授 江馬 一弘	我々の世界を構成しているものー光と電子の旅ー
13		理工学部機能創理工学 教授 平野 哲文	社会の役に立たない基礎科学は本当に必要か？
14		理工学部情報理工学 教授 萬代 雅希	デジタル技術と社会的課題のつながりを理解する
15		基盤教育センター 非常勤講師 鎌田 浩史	日常生活とデータサイエンス
16		名誉教授 高祖 敏明	潜伏キリシタンから「かくれキリシタン」へー長崎・天草のユネスコ世界文化遺産から探るー
17		名誉教授 小林 順治	教養としての組織論
18		神学部神学科 教授 武田 なほみ	聖書にみる人生の四季と希望ー「希望の巡礼者」として歩むー
19		文学部史学科 准教授 森田 直子	感情を歴史するー感情史研究の現代的意義と可能性ー
20		総合人間科学部心理学 教授 日高 聡太	心を情報処理機構として捉えるー認知心理学への招待ー
21		総合人間科学部社会学科 特別契約教授 藤村 正之	少子高齢社会、家族と人生の来し方・行く末ー大家族からおひとりさまへー
22		総合人間科学部社会福祉学科 准教授 平野 寛弥	社会を変えるための社会政策入門
23	社会変革	経済学部経済学科 教授 川西 諭	行動経済学者と考えるこれからの資本主義社会での働き方・生き方
24		総合グローバル学部 総合グローバル学科 教授 田中 雅子	「学ぶ」から「動く」へー国際人権規範を使って、自分の暮らしをとらえなおしてみようー
25		総合グローバル学部 総合グローバル学科 教授 丸山 英樹	自分と他者をサステナブルにする生涯学習ー2050年の教育と社会を再想像するー
26		国際教養学部国際教養学科 教授 ユー・アンジェラ	国際教養と生き方(1)ーなぜ名作を観る・読むのかー
27		基盤教育センター 特任助教 梅田 孝太	サステナビリティ時代の哲学ーわたしたちの価値観の持続可能性を問い直すー
28		SFD推進室 University Education Administrator (UEA) 山崎 瑛莉	アフリカの智でつなぐ世界ー食・布・学びの展開からー

2025年上智学院年頭式典

未来への決意表明ー教育・研究で新たな挑戦へ

1月6日、2025年の上智学院年頭式典が対面とオンラインで開催され、教職員約730人が参加した。

サリ・アガスティン理事長は新年の挨拶で、学院関係者への感謝を述べるとともに、昨年の災害や世界各地の紛争に触れ、「平和の重要性とその尊さを改めて認識した」と語った。

2025年はカトリック教会の「聖年」(Jubilee 2025)にあたり、テーマは「希望の巡礼者たち」。アガスティン理事長は「困難な時代において、全ての人々に希望を届けることが重要」と述べ、教育精神の実践をさらに深める必要性を訴えた。



上智学院が果たすべき役割について説くアガスティン理事長

また、2030年度を見据えた中長期計画「GL3.0」に触れ、教育・研究・社会貢献の各分野で新たな挑戦を推進する方針を再確認した。

終わりに、「上智学院が果たすべき役割は今まで以上に大きく、重要なものとなっている」と述べ、教職員一人ひとりが主体的に取り組むことの重要性を強調。「勇気を持って行動すること」を求め、学院全体で新たな挑戦に立ち向かう決意を改めて語った。

続いて登壇した曄道佳明学長は、社会の急速な変化と競争の激化に直面する中で、上智大学が果たすべき役割を再認識し、未来への挑戦を続ける重要性を強調した。また、「上智大学の上智大学たる所以」を問い直し、カトリック大学としての使命とイエズス会の教育精神「For Others, With Others」を再確認。人間の尊厳や社会正義、平和といった普遍的価値を追求する姿勢が、上智大学のブランドを支えてきたと述べた。

教育面では、学術的な深い思考力の養成とともに、社会で活躍するための資質を育む必要性を指摘。研究面では、「人間の尊厳」や「人間の安全保障」といったテーマでの拠点形成を目指し、国際的な研究連携を強化する意向を表明した。

さらに、曄道学長は4月から新学長に就任する総合人間科学部教育学科の

杉村美紀教授を紹介。杉村教授は「2025年は上智にとって大きな節目の年。皆様のお力添えのもと学長を務めていきたい」と、次期学長としての抱負を述べた。

式典は教職員有志の伴奏による校歌斉唱で閉会した。また、夕方には学生食堂で賀詞交歓会が行われ、教職員が親睦を深めた。

東京都「大学発スタートアップ創出支援事業」に採択
大学の多様な知をスタートアップに活用

11月12日、東京都による公募事業「大学発スタートアップ創出支援事業」に本学の企画が採択された。この事業は、東京都の支援を受けて、新事業創出や起業・新事業創出を促進する学内の体制整備を行うもので、令和6年度は本学を含め、9大学が採択された。

本学では、誰一人取り残されない持続可能な未来を実現する「包摂のイノベーション」という観点から、大学の多様な知をスタートアップに活用する取り組みに着手する。

具体的には、スタートアップ創出のための専門人材の配置や海外大学等の

ネットワークを活用した体制の構築を進め、東京都の多様性社会が抱える課題の解決に向けた提案や、少子高齢化に伴う課題を抱えた地域の活性化、更には共通の課題を抱える海外を含むその他の地域の課題解決に貢献し、共生、共創、共働のためのビジネス創出を目指す。

多様な分野の研究者が「か所に集う都心のワンキャンパスを持つ強みと、豊富な海外ネットワークを生かし、グローバルな視野に基づく総合知で社会課題解決に取り組むスタートアップエコシステムの構築に挑む。

IAU International Conference 2024

世界80の国・地域にある高等教育機関200校から320人が参加

11月22日から24日まで、四谷キャンパスでInternational Association of Universities (IAU) 主催の国際会議「IAU International Conference 2024」が開催された。本学はホスト校を務め、約80の国と地域から約320人の参加者を迎えた。

IAUは、高等教育の多様性と国際化の推進を担う国際的な会員組織。約600の教育機関や団体が加盟しており、暁道佳明学長はアジア太平洋地域の理事を務めている。

本年度のテーマは「変わりゆく世界における大学の価値」。3日間を通じて、30人以上の研究者が講演やパネル討議を行った。本学からは経済学部経済学科の青木研教授と総合人間科学

部教育学科の杉村美紀教授が発表を行った。

本会議では、技術革新が高等教育に与える影響、学問の自由や研究の誠実性の重要性、地政学的緊張が高まるなかでの大学の社会的責任などについて議論された。また、グローバル社会の課題解決に貢献する教育研究活動をさらに強力に進めていくことが改めて確認された。

23日には、在学生や教職員による日本文化や研究内容を紹介する企画が行われ、好評を博した。文化紹介では課外活動団体の箏曲部による演奏や少林寺拳法部の演武が披露されたほか、学教職協同プロジェクト「ピアカフェ」主催のブースでは、折り紙や書道、

けん玉などを楽しむ場が設けられた。また、短期大学の宮崎幸江教授、理工学部情報理工学科の中筋麻貴教授、表千家茶道部による紀尾井亭ツアーおよび茶道体験も実施され、参加者は和の空間と茶道文化を堪能した。

24日の閉会式では、ホスト校を代表して暁道学長が挨拶し、2025年度IAUのルワンダ大学での開催が発表された。暁道学長は、「日本の大学が国際的なコンソーシアムに参加し、世界の大学と連携して情報発信を行うことは、日本の高等教育の国際競争力を維持・向上する上で重要だ。今回の会議が新たな国際連携や協働の可能性を探る貴重な機会となったことを大変嬉しく思う」と述べ、開催を振り返った。



世界各国から100名以上の学長が参加



国内外の研究者が多彩なテーマで議論



紀尾井亭での茶道体験は大盛況

新たなエグゼクティブ教育の実現に向けて

カリフォルニア大学バークレー校 Haasビジネススクールとの短期コースを実施

12月9日～12日の4日間、Sophia Future Design Platform (SFDP) 推進室とUC Berkeley Executive Education (Haas School of Business 内、以下Berkeley Haas) 共催による短期ビジネスコース「Innovation Boot Camp」を開講した。

UC Berkeleyはビジネス、科学、技術などの分野で世界をリードする全米トップの公立大学。Berkeley Haasはシリコンバレーでの経験豊富な教員陣と、最先端のイノベーションおよびアントレプレナーシップ教育で知られる同校のビジネススクールである。

本学では、産学協働の学びの場を創成する企業会員制の講座「プロフェッショナル・スタディーズ(PS)」の会員企業の意見などから、大企業におけるイノベーション創出に関するプロ

ラムへの需要を把握。同分野の研究・教育において世界トップレベルを誇るBerkeley Haasに共催を呼びかけ、新たなエグゼクティブ教育の実現に向けて本コースを企画した。

Berkeley Haasからは、組織の柔軟性やダイナミックリーダーシップ等を専門とするDr. Homa Bahramiと、企業の成長、イノベーションやAIの戦略的展開等を専門とするDr. Saikat Chaudhuriが参画。本学からは、リアルアントレプレナーであるとともに、世界銀行グループなど複数の組織でリーダーや役員を歴任した西口尚宏特任教授が講師として参加した。

主な受講者は、PS会員企業および本学関係企業の役員、部長、若手幹部候補層。金融、製造、運輸、建設業など17社から32人のビジネスリーダー

たちが集った。

1～3日目は、Berkeley HaasのDr. BahramiとDr. Chaudhuriがケーススタディやグループディスカッションを交えて講義を実施した。講義は双方向で進行し、受講者たちが所属企業の実情や課題について発表した後、講師がそれを普遍化した課題に置き換え、解決策となり得る知見やアイデアを共有した。

西口特任教授による最終日のセッションでは、参加者が所属企業ごとのグループに分かれ、ディスカッションを通して全3日間の学びを体系化した。また、本コースの集大成として「2035年に輝いている自社のプレスリリース」というテーマで各社がプレゼンテーションを行った。その後の修了式では、受講者に本学とBerkeley Haas連名の修了書が手交された。

各日のプログラム終了後には、参加者同士の交流の場が設けられ、業種や職種を越えた人脈作りの場となった。受講者からは、「大企業におけるイノ



セッションは常に双方向で進行



ディスカッションで自組織の現状と課題を再認識する参加者

ベーションというテーマと講義の内容、他業種の方とのコミュニケーションの組み合わせが非常に良かった」、「シリコンバレーの成功者の立ち位置だけではなく、既存企業の戦略を考えることで自社の立ち位置で考える訓練ができた。企業の強みを認識することができ自信になった」などの感想が寄せられ、好評のうちに終了した。

8年目を迎えた学生と教職員の協働イベント

ソフィア・ダイバーシティ・ウィーク

多様性理解の中で自らのアイデンティティとステレオタイプを探る

ダイバーシティ・サステナビリティ推進室は、毎年11月25日の女性に対する暴力撤廃の国際デーから12月10日の世界人権デーまでの期間(12月3日国際障害者デーを含む)をソフィア・ダイバーシティ・ウィークと位置づけ、毎年さまざまなイベントを行っている。学生と教職員が協働し、多様性を受け入れる共生社会を目指して8年目を迎える今年は、6つの対面イベントと5つの期間中常設展示企画を実施した。

今年のテーマは「アイデンティティとダイバーシティ」。全プログラム共通で参加者に多様性理解の中でアイデンティティやステレオタイプについて

考えてもらうことを目的とした。例年ない取り組みとして、学外者や企業との連携企画が多数実施され、福祉×アート×ビジネスで新たな文化を創ることを目指す株式会社ヘラルボニー協力のワークショップや、女性の体型に合うメンズライクなスーツブランドKeuzes(クーゼス)代表田中史緒里氏の講演、Netflixシリーズ「THE BOY-FRIEND」に出演のAlan Takahashi氏によるトークイベントなどが実現した。

27日に行われたヘラルボニー協力の「体験型ワークショップ」では、参加者が、言葉が話せない、耳が聴こえないなどのマイノリティ役とマジョリティ役に分かれ、チームを組んで高難度の謎解きゲームに3時間をかけて挑んだ。冒頭に、謎を解くには「異なる者が向き合うことが重要だ」とルールが説明され、参加者は皆チームメイトへの配慮に努めたが、次第に「謎を解きたい」気持ちと焦りが強くなり、それぞれの立場で、誰かを取り残している、あるいは、取り残されていること

を体感した。講師を務めた同社の菊永ふみ氏は「障がい配慮することは当たり前で、その先にある、個人の強みを生かし最大化するということがこそ重要だ」と語った。

今年度のダイバーシティ・ウィーク学生実行委員長を務めた竹村駿一さん(外英3)は、「学生の参加ハードルを

下げることが重点課題だと感じ、企業参画やゲストスピーカー招聘などに取り組んだ。イベントが華やかになる一方で、社会問題に素朴に取り組むダイバーシティ・ウィーク本来の在り方にはこだわりたく、バランス調整に苦心したが、苦勞が実り多くの方にご参加いただくことができた」と語った。

Sophia Open Research Weeks 2024

—上智大学研究機構主催—

今年度は11月5日から24日まで行われ、研究機構下の研究所・センターの他、附置研究機関、研究プロジェクトなどから、専門分野や、移民・難民、AI、SDGsなど、近年話題の研究トピックを紹介する合計21の企画が行われ、高校生を含め学外からも多くの来場があった。また、若手研究員による報告会や、理工学研究科の大学院生のポスター発表など、次世代を担う研究者の発表、交流の場ともなった。

今年度の新たな試みは、研究推進センターURA (University Research Administrator) による展示イベント「Sophia100人論文」。これは、1枚の画像と3つの項目(「私の研究はこん



6号館1階で行われた「100人論文」展示な感じ」、「こんなこと知りたい、話したい、教えてほしい」「このことなら私に聞いて」で構成されたポスターに、来場者がポストイットやシールでコメントや反応を行うことで、分野を超えた研究交流と連携を促進するもの。自由な議論のためにポスター掲示もコメントも匿名で行われた。発表募集の呼びかけに対し、学部生から教員まで、文理を超えた60の研究ポスターが集まり、期間中は200人を超える来場があった。多彩な研究分野が広く認識される機会となった。



©橋本美花 / Mika Hashimoto

ヘラルボニーコンテンツクリエイター菊永ふみ氏による体験型ワークショップの様子

新留学プログラム「ソフィア・インターコンチネンタル・プログラム」が開始 学生自ら計画し、2か国以上の国で学びを深める

グローバル教育センターは、2025年度より新たな留学プログラム「ソフィア・インターコンチネンタル・プログラム」を開始する。参加学生は自ら設定した課題に基づき、プロジェクトを立案・実行し、その過程で2回以上、異なる国に渡航する。渡航先や期間も学生自身が決定する、これまでにないユニークな内容となっている。

プログラムの目的は、学生が多様な視点を持ち、サステナブルにグローバル社会に貢献できるリーダーシップを育むことにある。参加者は本プログラムの指導教員である島田久仁彦特任教授のサポートを受けながら、さまざまな仮説を立て、複数の国や文化の中で課題を検討し、具体的な解決策を模索する。

実施期間は2025年春学期から秋学期までで、夏期休暇や春期休暇中も含まれる。1回の渡航につき1か月以上の滞在が必要で、費用は自己負担となるが、1人あたり50~70万円の奨学金が支給される予定。

グローバル化推進担当副学長の森下哲朗教授(法学部国際関係法学科)は、「このプログラムは学生が主体的に課題を設定し、現実の社会に貢献する解



学生へ新しい留学プログラム設立に込めた思いを語る森下副学長

決策を模索する場。異なる国や文化に触れることで、視野を広げ、深い学びを得てほしい。多くの意欲ある学生の参加を期待したい」と語る。

応募条件は、渡航時に学部正規生2年次以上または大学院生であること、英語力CEFR B2レベル以上(TOEFL iBT 72、TOEIC 785相当)を有することなど。書類審査と面接審査を経て参加者が決定される(出願期間はすでに終了)。

2025年度はパイロット版として実施されるため単位付与はないが、学生が主体的に計画を立て、異文化交流を通じて学びを深める貴重な機会となる。将来的には、内容の拡充や改善も検討されており、本学ならではのグローバル教育の新たな挑戦に期待が高まる。

日本の伝統工芸とものづくりの魅力を伝える「SOTOBORI展」 経済学部ジョーンズ教授ゼミが企業12社と協力

経済学部経営学科アダム・ジョーンズ教授のゼミ生8人と企業12社が協力し、日本の伝統工芸とものづくりの新たな可能性を探る展示会「SOTOBORI展」を12月10日~21日までの12日間、東京・日本橋横山町のTOIビルにて開催した。

ジョーンズ教授が担当するゼミでは、2019年度からグローバル市場における文化・創造性産業を取り上げる産学連携プロジェクト「SOTOBORI PROJECT」を実施。ものづくりに携わる企業とともに、工場・工房訪問、課題・顧客分析、ブランディング戦略などを通して、学生ならではの視点で伝統と現代のライフスタイルをつなぎ、新たな価値を創出する検討を重ねてきた。

過去5年間の集大成となる本展示会には、日本のものづくりに携わる企業が一堂に会し、職人の技と想いが詰まった作品や商品の販売に加え、その制作過程に用いられる道具や素材を展示した。「『想』伝統を紡いで、想いを贈る」をテーマに、「日本の職人が作品に込める本気の想い」と「人を想って贈り物をする文化」の二つの「想い」を来場者に伝えるとともに、ものづくりの精神と職人の技に触れてもらうことで伝統工芸品を日常生活に取り入れるきっかけを提供。さらに期間中には、製作を

通してもものづくりの楽しさと技術を体験できるワークショップも行われた。

展示会場には、100点以上の品々が集結。テーマにもある「贈り物」をイメージしやすいよう、ラッピングされた商品が会場中央の目立つ位置に展示された。また、陳列時の工夫として、商品横には作品や企業の特徴・魅力に加え、来場者に対し、作品に触れて体験することを促すゼミ生特製のオリジナルポップが添えられた。

ゼミ生らは今回の展示会を、「多くの方に来場いただき、展示会を通して私たちの世代からものづくりの価値を提案できたことは大きな意味があると感じています。また、展示会を機に企業間の新たな交流も生まれており、この展示会が新しいものづくりのきっかけになれば嬉しく思います。今後後輩たちがこのプロジェクトをさらに発展させてくれることを願っています」と振り返った。



手拭いや江戸切子など、100点以上の伝統工芸品が展示された

駐日中国大使と 若手外交官が来訪

学生との交流会で 活発な意見交換も実施

12月20日、呉江浩駐日本国特命全権大使をはじめとする中華人民共和国駐日本国大使館一行が本学を訪問し、曄道佳明学長、森下哲朗グローバル化推進担当副学長、伊呂原隆学務担当副学長と面会し、その後本学学生と交流した。

学長との面会では、将来の日中関係の土台となる学生交流をますます促進していくことや、国際機関で活躍する人材を協力して育成していくことが重要課題として挙げられ、今後も継続して両者で取り組んでいくことが確認された。

学生交流会では、都留康子総合グローバル学部長の司会進行のもと、中国大使館の若手外交官10人と本学学生が5グループに分かれ、今後の日中関係をさらに発展させるという観点で意見交換を実施。外交レベルだけでなく、市民や民間の草の根レベルの交流を促進し、互いの叢智を結集しながら国際関係の改善を図っていくべきだとの認識を共有した。

学生によるディスカッションの総括に続き、呉大使より本学学生へ感謝の言葉が伝えられ、「相手の国を実際に訪問することは真の国際理解を深めるために大切であり、日本から中国への短期滞在査証免除措置が再開されたことを機に、どんどん中国に来てほしい」と述べた。曄道学長も、「若い世代の交流を通して生まれるアイデアが国際関係を深めるエネルギーになる。本学が多数の協定校を持つ中国へ留学

などでぜひ訪れて欲しい」と語った。

最後に、学生を代表して山下曜さん(総3)から呉大使へ花束が贈呈され、全員で記念撮影を行った。交流会終了後も話が尽きず、引き続き話し込む若手外交官と学生の姿も見られ、相互理解を深める貴重な機会となった。



グループディスカッションの内容について発表する学生

「Breeze Lounge」が 2号館4階に完成

環境や多様性に 配慮した憩いの場へ

12月4日、2号館4階のスペースに「Breeze Lounge」が完成した。「それぞれにとって居心地のよい空間」をテーマに、ダイバーシティ・サステナビリティ推進室の学生職員が企画し、授業の合間などにリラックスして過ごす学生たちの憩いの場となっている。

これまでは机と椅子が無造作に配置されただけだったこのスペースには、9月のプレオープンを経て芝生をイメージした緑のカーペットが設置されたほか、ベンチやテーブルには間伐材と再生紙を組み合わせた「ペーパーウッド」という木材が用いられるなど、環境にも配慮した設備が導入された。

12月には、誰もが安心して利用できる配慮がなされたトイレが設置さ

れ、ランドオープンを迎えた。新たに設置された3つのトイレは、いずれも個室のなかで用足し・手洗い・身支度ができる「個室完結型」で、座って休めるベンチが設置されたものや、車いすで利用できる広さを確保したものなど、利用者の選択肢の幅を増やした。

本プロジェクトを担当した学生職員の橋野陽和さん(法4)は、「都心のキャンパスの中でも、落ち着いて過ごせる風通しの良い空間となるよう『Breeze Lounge』と名付けました。トイレエリアの設計が特に大変で、トイレメーカーへの視察などを通してどうしたら利用者に安心感をもってもらえるのか幾度も検討を重ねました。今後も学生の声を集めながら、キャンパス内に学生が過ごしやすい空間を創っていきたいです」と話している。



再生原料が使われた床材や備品

学生向けアプリ 「My Sophia」を 3月リリース

学生生活の利便性向上を図る

本学は在学生の利便性向上を目指し、学生向けポータルアプリ「My Sophia」を3月中旬にリリースする予定だ。このアプリは、大学からの情報を一元化し、学生が必要な情報へ簡単にアクセスできる仕組みを提供する。

Webブラウザ版とアプリ版の2種類が用意され、アプリはApp StoreやGoogle Playからダウンロード可能となる。

「My Sophia」の開発は、「Loyola」の課題を解決するために始まった。Loyolaは長年にわたり機能が肥大化し、「使いにくい」「情報が見つけにくい」といった声が寄せられていた。これらの課題を解決するため、新アプリではLoyolaや各部署のWEBサイトで個別に掲載されていた情報が将来的に一つのアプリで確認できるようになる。

「My Sophia」の名称は、「自分に関する情報が集約されている」というコンセプトから付けられた。開発のワーキンググループには10部署から約20人が参加し、2023年から2年間のプロジェクトとして進められている。今後は、Loyolaや掲示物を通じて学生への周知を図る。

担当の情報システム室中嶋宏治さんは「学生が必要な情報を一つのアプリで確認できるようにすることを目指した」と語る。新アプリの導入により、学生生活の利便性が大幅に向上することが期待される。



さまざまな情報に
スマホアプリや
ブラウザからアクセ
スができる

課外活動団体組織 新代表者決定

課外活動団体組織の新代表者が選出され、新体制が発足した。本学の課外活動団体は「文化団体連合会」「体育団体連合会」「音楽協議会」「演劇協議会」「同好会愛好会連合(体育系・文化系)」の5つの組織と、その他代表団体および未組織団体によって構成されている。

新たに代表者を選出した「体育団体連合会」「音楽協議会」「演劇協議会」の3つの組織に、所属団体の活動内容や団体組織代表としての抱負などを聞いた。

【体育団体連合会(42団体/1,534人)】

新委員長は体育会ラグビー部の佐藤豪さん(法法3)。ラグビー部は、関東大学対抗戦Bリーグに所属し、週6回の練習とウエイトトレーニングに励んでいる。部では育成体制に力を入れ、初心者から全国大会出場経験者まで幅広く試合で活躍している。15人で繋いだボールがトライに結びつき、接戦を制したときに達成感が得られるという。

「今期は『強化』に注力し、体育会活動環境の整備と体育会所属の学生数増加を目指す。これまで熱い上智を目標に活動してきたが、強く勝てる上智の実現にシフトしていく。まずは上南戦で圧勝し、強い上智を見せていきたい」

【音楽協議会(10団体/480人)】

吹奏楽団(SMB)の亀谷さくらさん(文独2)が新代表。SMBは「生涯音楽を楽しむ」ことをモットーに活動し、ジャズ・ポップス・クラシックなど幅広いジャンルの曲を扱っている。12月の定期演奏会をはじめとするコンサートに向けて練習に励んでいる。

「音楽協議会としては年に数回、協議会に所属する団体が参加するコンサートを主催している。音楽という共通点から集まった様々な演奏者らが、新たな交流の機会や音楽の形を見つける場を創造していくと同時に、活動を通して感じた音楽が持つ力を広く伝えていけるよう、メンバーと共に尽力したい」

【演劇協議会(6団体/105人)】

上村幸穂さん(文仏2)が新会長。所属する劇団ソフィアトリスクエアは、1号館講堂で年に数回オリジナル脚本による公演を開催している。脚本や演出、役者だけでなく、音響や照明、舞台といった裏方も自らで協力しながら作り上げている点が特徴であり、公演に向けて日々活動に取り組んでいる。

「演劇協議会は各団体が滞りなく公演に取り組めるようサポートしている。一から自分たちで作り上げるためにも、幅広い技術の継承と周知が課題である。今年度は新メンバーを多く迎えて、技術の引継ぎに努めたい」



佐藤豪さん



亀谷さくらさん



上村幸穂さん

ユエン凱さんがプロ野球独立リーグに挑戦 福島レッドホープスにドラフト1位で入団

12月、プロ野球独立リーグに加盟する福島レッドホープスにユエン 凱さん(国教4)が入団し、プロ野球選手としての一步を踏み出した。



関東地方5県と福島県、山梨県、長野県を活動拠点とし、06年に独立リーグとして設立されたルートインBCリーグ。同球団は福島県に活動拠点を置き、各県を拠点とする全8チームが2地区に分かれリーグ優勝を目指して争う。

投手としてルートインBCリーグドラフト1位で指名されたユエンさんが背負う番号は18番。185cmの長身右腕から投げ込まれる最速145kmのストレートとキレの鋭いスライダーが武器だ。「攻めの投球で空振りを狙っていききたい」と抱負を語る。

2月から始まる福島での単身生活には、4年間の思い出が詰まった上智の野球帽とチームメイトから贈られたアルバムを持参するという。家族からは「自分で切り開いた道。後悔しないよう全力を出し切っておいで」と送り出された。

ユエンさんは、カナダのSt. Joseph High Schoolを経て20年9月に本学に



硬式野球部を引退してからもプロ入りに向けて体を作り直した

入学。硬式野球部に入部し、1年生時からリリーフとしてピッチャーマウンドに立った。

「入部してしばらくは球速にこだわって過ぎて自分本位の投球をしていたせいか、なかなか思うような成績が残せませんでした。学年が上がるにつれ、試合を作る投球を意識したことで制球が安定し、その意識の変化がドラフト指名にも繋がっていたんだと思います」

大学を卒業してからも絶対に野球を続けたいと模索し、自分で掴んだ夢の舞台。「自分を迎え入れてくれたチームの期待に応えて恩返しできるようなプレーをし、福島の人に希望や元気を与えられる選手になります」と熱意をのぞかせた。

ひと

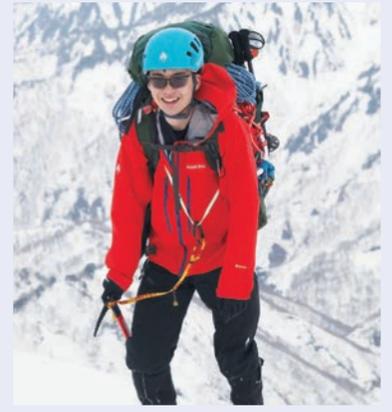
新しい景色を目指して 次の山頂へ

日本各地の山脈踏破をチームで目指すワンダーフォーゲル部。未経験で入部し、67期主将として73人の部員をまとめ上げてきた渡辺龍さんは「大自然への畏敬の念を抱きながら『生きる』ことに向き合えるスポーツ」と話す。

入部後、初めてチャレンジした瑞牆山の山頂に広がる眺望は、想像をはるかに超える絶景だった。瑠璃色の空、遠くまで広がる雄大な山々、豆粒ほどに小さく見える都市。これまでインドア派だった渡辺さんにとって、全く新しい世界がそこにあった。「入部してからは、精神面もかなり鍛えられましたね。追い詰められてからの一歩が踏み出せるようになったし、泥だらけの状態でも数日くらいシャワーを浴びなくてもへっちゃらです」

登山には、足腰や体幹を鍛えるトレーニングのほか、天候を予測し、地形を読む技術も必要になる。「登頂の際は、メンバー全員が無事に帰還できるよう綿密な計画を立てます。道中に危険な岩場がないか、万が一の際はどこで救護を要請するか、常に頭に入れています」

それでも、自然相手のスポーツは時として命を脅かす。残雪期、2泊3日で挑んだ巻機山。越後山脈に連なる日本百名山のひとつだ。「最終日、右足の負傷を抱えたまま、長い



経済学部経済学科3年 渡辺龍さん

尾根の上で何度も足が止まりました。目の前には雪崩の跡、一步踏み間違えれば崖下へという状況。ヘリへの救助要請も頭をよぎるなか、なんとか窮地を脱し、民家が見えてきたときは、まさに『自分は生きてるんだ』と感じた瞬間でした」

危険が伴うなかでも山頂を目指すのは、日常では決して出会う事のできない景色のためだ。「野生のカモシカやライチョウ、これまで知らなかった信仰対象としての山の存在。地形を生かした山岳農業の知恵や、現地の人々との出会い。山を通して自分の世界が広がっていくのを実感しています」

Wandervogel—その言葉が意味する渡り鳥さながら、雄大な自然を感じながら各地を渡り歩き、自分の世界を広げていく。「仲間とともに困難を乗り越え、分かち合った経験が、次の山頂への一歩となります」

おつまみを買いたくなる 投稿が話題を呼ぶ 経済学部の学生が なとりと共同キャンペーン

11月末～12月上旬にかけて、経済学部・小阪次郎講師のゼミと株式会社なとりが共同で「#あなたのタラ採用します!クリスマスのごと投稿キャンペーン」をX(旧Twitter)上で実施した。

この企画は、製品開発論を専門とする小阪ゼミに所属する学生の「自分たちが本当に買いたくなるプロモーションを企画したい」という思いと、同社の「おつまみをもっと若い方に知ってほしい」という思いが重なり、産学連携の一環として実現。学生は、ゼミの授業を通じてなとりの社員から食品業界のマーケティング戦略などを学び、チーム対抗で若者向けのプロモーション企画を立案した。

その中で最も優れたアイデアとして

採用された本キャンペーンは、主力製品の「チータラ」「チーズ鱈」にちなんで、クリスマスの願い事の語尾に「タラ」を付けてX上に投稿するというもの。斬新な企画が話題を呼び、一般から2700件を超える投稿が寄せられた。「あなたのお願いが叶うで賞」には「サンタが枕元にチータラ置いてくれタラ」などが選出された。

小阪講師は「SNSを使って気軽に参加できる言葉遊びが、おつまみの手軽さと調和して、効果的なプロモーションになっている。こうした企画を通じて、学生が学びを得るとともに、企業側にも新鮮さを感じてもらえていたらと思う」と振り返った。



実際に商品を手に取り企画を考案する学生

上智大学通信が冊子版として フルリニューアルします

2025年度に広報紙『上智大学通信』がフルリニューアルします(新名称は未定)。

上智大学通信は大学と学生およびそのご父母・保証人、教職員とのコミュニケーションを深めることを目的に、本学の教育・研究活動、学内の行事やイベント、話題などをお届けしてきた広報媒体です。今回のリニューアルでは、本学の取り組みや魅力をより効果的に発信し、国内外の読者にとってさ

らに親しみやすい媒体を目指します。

新しい上智大学通信では、日本語と英語の二言語表記になります。また、デジタルブック形式でのWeb公開もあわせて行うことで、国内外の幅広い読者がアクセスしやすくなります。そして、タブロイド版から冊子版へと形態を変更し、年2回(夏・冬)発行の新しい広報誌として生まれ変わります。

創刊号は2025年夏に発行予定です。新たな広報誌にどうぞご期待ください。

※現行の上智大学通信は、次号(3月発行予定)が最後になります。